

ヒト十二指腸パネート細胞における膵蛋白分解酵素の免疫組織化学的発現：とくに膵の形態および組織像との関連性について

著者	吉光 裕
著者別名	Yoshimitsu, Yutaka
雑誌名	博士学位論文要旨 論文内容の要旨および論文審査結果の要旨 / 金沢大学大学院医学研究科
巻	平成8年7月
発行年	1996-07-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/15351

学位授与番号	医博甲第1194号
学位授与年月日	平成8年1月31日
氏名	吉光裕
学位論文題目	ヒト十二指腸パネート細胞における膵蛋白分解酵素の免疫組織化学的発現 —とくに膵の形態および組織像との関連性について—
論文審査委員	主査 教授 宮崎逸夫 副査 教授 磨伊正義 教授 渡邊洋宇

内容の要旨及び審査の結果の要旨

膵外分泌機能障害時におけるパネート細胞と蛋白消化能との関係を知ることを目的として、膵胆道悪性腫瘍切除28例を対象に、ヒト十二指腸パネート細胞における膵蛋白分解酵素の免疫組織化学的発現と膵の形態、組織像および膵外分泌機能との関連について検討をおこない、以下の成績をえた。

1. 膵トリプシン染色において、十二指腸パネート細胞の細胞質顆粒に免疫組織化学的発現をみとめた。その発現は、パネート細胞すべてに発現をみとめる症例から、一部のパネート細胞にのみ発現をみとめる症例まで多様であった。
2. 十二指腸パネート細胞において膵キモトリプシンの免疫組織化学的発現はみられなかった。
3. 腫瘍の浸潤により膵主膵管が閉塞している群では主膵管非閉塞群と比較して、1陰窩あたりの平均パネート細胞数が有意に増加していた。また、主膵管閉塞群では非閉塞群と比較して、パネート細胞におけるトリプシン陽性率は有意に高率であった。
4. 膵腺房細胞残存率と1陰窩あたりの平均パネート細胞数およびパネート細胞におけるトリプシン陽性率との間には、それぞれ有意な負の相関がみとめられた。すなわち膵腺房細胞残存率が低率であるほど、1陰窩あたりの平均パネート細胞数は増加しておりパネート細胞におけるトリプシン陽性率は高率であった。
5. また、PFD試験で異常値を呈した群ではPFD試験正常値群と比較して、1陰窩あたりの平均パネート細胞数は有意に増加していた。

以上の結果は、膵腺房細胞に障害があり膵外分泌機能の低下があると、十二指腸においてパネート細胞の数が増加し、さらにパネート細胞におけるトリプシン陽性率が増加していることを示しており、膵外分泌機能障害に際して、パネート細胞が蛋白消化能の代償に関与している可能性を示唆するものである。

以上、本研究は膵胆道悪性腫瘍による膵外分泌機能障害時の十二指腸のホメオスタジスとも云える所見を明らかとした消化器病学に寄与する労作であると評価された。